



速水洋子；西 真如；木村周平（編）。『人間圏の再構築——熱帯社会の潜在力』講座生存基盤論 第3巻。京都大学学術出版会、2012、385p.

熟慮を重ねて、丁寧に編み上げられた論集である。本書に収められた12の論考は、対象地域も扱うトピックも多岐にわたり、それぞれの分野の研究史において独自の意義をもつものである。しかし、本書のもっとも秀逸な点は、これらの、一見すると「バラバラ」にも見える論考が、互いに響きあって、見事に一本の道筋を見せてくれるところ、そしてそれがよりよい未来に向けた力強い提言となっているところにある。

本書は、京都大学グローバルCOE（GCOE）プロジェクト「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」の研究成果として出版された講座生存基盤論の第3巻にあたる。この講座が掲げている大きな目的は、「生産」から「生存」へ、そして「温帯」から「熱帯」へという視座の転換である。本書は、この視座の転換を、熱帯社会におけるケアの実践や配慮の関心に着眼することによって、見事に成し遂げている。

本書はまず、温帯地域を中心として広がる先進産業社会がつくりあげてきた価値観、すなわち人間が人間に働きかける能力や、人間と自然環境との相互作用が、生産性の向上という一点で評価されてきたことに疑問を投げかける。そして、この生産至上パラダイムこそが、生存の停滞を招き、生存基盤を揺るがしていると批判する。これに代わって、本書が提案するのは、「他者に対するケアの実践と、それを裏打ちする他者の生存と人格への配慮」（序章p.5）の価値を見直すことである。ケアの実践こそが、他者の生存を支え、その価値を承認するものであり、その結果、生存の質をよりよいものとするというのである〔西2012〕。

ここで本書が焦点化するの、副題にあるとおり「熱帯社会の潜在力」である。温帯の先進産業社会においては、ケアは、家族として囲い込まれ

た「再生産」の領域に追いやられ、その価値が十分に評価されてこなかった。これに対して、熱帯地域においては、ケアの関係が閉鎖的な単位に閉じ込められることなく、むしろそこから外へと広がるものとして存在し、その実践に支えられ、レジリエントな社会を築く潜在力がみられるという。

こうした問題意識に基づいて、本書では、「生のつながりとケアの論理」「ケアの政治学と人間圏のレジリエンス」「人間圏をとりまく技術・制度・倫理の再構築」と名づけられた3編を通して、熱帯社会におけるケアの実践や関係についての多様な事例が提示され、より持続的な生存基盤を構築していくための議論が深められていく。

まず第1編に収められた4つの論考は、熱帯社会が培ってきたケアの実践や配慮の関係が、これまで想定されてきた範囲をはるかに超えて、豊かに広がっていることを、鮮明に描き出す。第1章（高田明）は、「ヒト本来の子育て」と一般化されてきたナミビアの狩猟採集民サンの養育には、母親以外の人々も重要な貢献をし、また母子関係自体もより広範な人々のつながりに支えられていることを指摘する。第2章（佐藤奈穂）もカンボジア農村において、子どもや高齢者へのケアが、世帯を超えた広がりのある親族関係によって支えられ、それによって状況に応じた対応が可能になっていることを示している。第3章（吉村千恵）では、タイを舞台として、ケアされる対象とみなされがちな障害者自身が、障害を介して、地域ベースのケアのネットワークを拡大していく様子が描かれる。そして第4章（速水洋子）では、タイを事例に、親密圏において築かれるケアの関係性のなかで発した動きが、さまざまな連携をつくり、公共圏における声へと発展していく過程が論じられる。このように第1編は、熱帯社会のケアを中心としたネットワークの豊穡さを強く印象づける。それゆえ読後に、こうしたケアの実践は、たとえ困難なときにあってさえも築かれるものなのかという次なる疑問が浮かぶ。

これに答えるのが第2編である。ここでは、熱帯社会が直面する困難な状況を的確に分析し、そのなかでもなお互いに配慮をしよう肯定的な関係が築かれていることに光が当てられる。第5章（西

真如)では、エチオピアにおいて HIV ウイルスの感染者と非感染者のあいだに互いの生存に配慮しあう関係が築かれていること、第6章(佐川徹)では、東アフリカの紛争多発地域においても、偶発的な出会いを契機に、「敵」とも感情的紐帯のともなった親密な関係が築かれていることが明らかにされる。また第7章(舟橋健太)は、多様な価値観が競い合うインド社会の改宗仏教徒らによる、一見、矛盾してみえる運動のあり方が、相手の人格を配慮することを重視した平等の希求であることを論じる。第8章(遠藤環)では、タイの都市下層民の遭遇するリスクに、個人や世帯、コミュニティがそれぞれのレベルで柔軟な対応をすると同時に、コミュニティをも越境した連携が重要な役割を担い始めたことを指摘している。これらはいずれも「悲劇のなかで輝く例外的な美談」として扱われるべきではなく「極限的な状況下でも、他者の生存へ配慮……することができる人間の潜在能力をみてとり、その能力やその配慮から生みだされた関係性が、人々の生存基盤の確保……にいかなる役割を果たしうるのであるのかを検討」(第6章 p.185)するという立場を強く共有している。そのうえで公衆衛生や平和構築、平等、コミュニティ開発などの既存のあり方に批判的な視線を投げかけることに成功している。

ここまで読み進めると、本書が主張するケアの実践や関係が熱帯社会において重要な位置を占めていることが十分に伝わる。と同時に、それらをいかにして本講座の目的である持続可能な生存基盤の構築につなげるのかと問いたくなる。この問いに、ローカルに見られるケアの関係性と、それを取りまく外的な要素とが接合する具体的な場面を追うことによって答えようとするのが、第3編である。第9章(篠原真毅・木村周平)は、宇宙太陽発電を事例に、その実用化をめぐるのは多様な利害関心が絡みあうが、そこで必要とされるのは個々の生への関心から出発し、多様な存在の生存に配慮するような、新たな政治的枠組みだと説く。第10章(山越言)はギニアにおけるチンパンジー保全をめぐる外来の科学知と在来の経験的知識のせめぎあい进行分析し、両者の両立には、「寡黙で気まぐれ」な在来知を十分に理解することが重

要であることを示す。第11章(孫曉剛)は、東アフリカ乾燥地域の牧畜民が培ってきた旱魃のリスクを回避する知識、技術、制度を評価し、それを基盤として科学技術を活用することが生存基盤の強化につながると主張する。最後の第12章(常田夕美子・田辺明生)では、インドの鉱山開発とそれへの反対運動を例に、従来、対比的に捉えられてきたグローバルとローカル、公共圏と親密圏などがオーバーラップする領域が拡大していること、そのなかで持続型生存基盤を確保するためには、代表制や所有制のなかで周辺化されてきた様々な存在が主体性を発揮し、対話を続けられる新たな仕組みが欠かせないことが論じられる。第3編を貫くのは、具体的な事例の分析にとどまらず、それをもとに新たな世界のあり方を構想しようとする前向きな姿勢である。

このように各編は一貫した主張を持ち、そこで呼び起こされる次なる問いに、次編が具体的な論考で答えていく。この点で、本書は、全体がひとつの大きなストーリーをもって、周到に構成されている。そして全ての論考が共通して目を向けるのは、これまでいわば「例外」として見過ごされがちだった極めて具体的な関係や実践である。その「例外」が生起する具体的な場面を丹念に追い、それらを「例外」とみなしてきた既存の見方や考え方に対して再考を迫っている。

本書を読み終えたからこそ、さらに浮かぶふたつの問いがある。それを本講座が目指すふたつの視座の転換という点に着目して述べてみたい。ひとつは「温帯」から「熱帯」へという視座の転換にかかわる問題である。本書は、二元論的な対置を回避しようという努力はされているものの、ケアに価値を置く熱帯と、そうではない温帯という対比が全体の枠組みとなっている印象は拭いきれない。しかし読後に気づかされるのは、むしろ温帯の先進産業社会の代表とされる日本にも、本書が光を当てたようなケアの実践や関係が息づいていることである。多少の飛躍を承知でいえば、本書もまた、GCOEという、いわば研究の「生産性」をあげることを目的としたプロジェクトの成果ではあるが、このプロジェクトを通じて議論の場が担保され、互いの考えに耳を傾け、それを尊重し

あってきた関係性が築かれたからこそ、対象地域とディシプリンの境界を越えて、互いの研究が響きあう論集として仕上がったのではないだろうか。温帯社会を、生産至上の社会と論じることそれ自体が、この社会にも確かにあるケアの実践や関係をますます不可視の領域へと追いやるとすれば、私たちが次にすべきことのひとつは、熱帯地域と温帯社会を対比して、後者を批判的に見るにとどまらず、温帯社会でこそなおさら「例外」とくくられがちなケアの広がりを正統に評価することのように思える。

2点目は、「生産」から「生存」へという視座の転換と関係している。本書では具体的かつ対面的に築かれるケアや配慮の関係は、個々の「生存」を支えるものとして描かれているが、一方で「ケア労働」とよばれるように、ケアは貨幣価値をもつ「生産」領域のものとしてとらえられ、そして近年では地域や国家を超えてグローバルに流通しているのも事実である。東南アジアの人々が、ケアギバー、すなわち看護・介護労働者として日本などへ出稼ぎに行くことも、ケアを求めて東南アジア諸国に長期滞在・移住する日本人高齢者の数も増えている。熱帯社会の人々のケアのあり方は、医療や福祉の文脈において商品化・産業化が進んでいる。また自然、すなわち生命圏・地球圏に対して築かれるケアの関係性でさえ、市場化される文脈がある。オーストラリア先住民のアボリジニは、自然とのかかわり方を「大地に対するケア」と表現してきたが、オーストラリアという先進産業国にあっては、彼らのそうした行動は失業対策のなかに組み込まれ、賃金が支払われる。今日、アボリジニは自分たちの「大地のケア」が貨幣価値を生むものであることを強く認識している。このように、ケアという概念や言葉、その実践そのものが生産至上のパラダイムへと組み込まれ、そのなかでこそ存続しているという現象をどのように考えるべきか。温帯社会と熱帯社会が急速につながりつつある今日、両者の絡まりあいをさらに丁寧に見ていくことが次に必要とされるのではないだろうか。

このように本書は、さらなる問いを呼び起こし、新たな論点を生み出す刺激的なものとなっている。

最後に指摘しておきたいのは、本書を支えているのは、著者らが長期にわたるフィールドワークのなかで培ってきた熱帯社会に対する信頼と敬意、そしてこの世界はきつともっと暮らしやすいところになるはずだという確信であるという点である。それが感じ取れるからこそ、本書は、地球全体の未来を見通した壮大な提案を、しっかりと地に足をつけて論じた好著となっている。

(丸山淳子・津田塾大学学芸学部)

参考文献

- 西 真如. 2012. 「熱帯社会におけるケアの実践と生存の質」『生存基盤指数——人間開発指数を超えて』講座 生存基盤論 第5巻, 佐藤孝宏; 和田泰三; 杉原 薫; 峯 陽一 (編), 193-226 ページ所収. 京都大学学術出版会.

清水 展. 『草の根グローバリゼーション——世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』地域研究叢書 25. 京都大学学術出版会, 2013, 468p.

まずは6ページに掲げられた一枚の写真に瞠目させられる。本書の主要な登場人物の一人であるキッドラット・タヒミックと著者がはじめて出会った1982年の映画祭でのショットである。あとがきによると本書に結実する現地調査は直接的には1997年から2009年の13年間のべ230日にわたるが(それだけでもかなり息の長い仕事と言えるが)、それ以前よりフィリピンをフィールドとした30年来の関係構築と研究蓄積が下支えとなり、結果として著者・清水展にしか著しえないエスノグラフィーとなった。

本書の舞台であるフィリピン・ルソン島北部のイフガオ州フンドゥアン郡ハバオ村は、ユネスコ世界遺産に指定されたことで世界じゅうに知られる棚田の村である。ピヌゴと呼ばれる棚田上方の森林の伐採・枯衰は、土砂崩れや灌漑用水の減少などの原因となるので、植林による環境保全が必要である。植林運動に立ち上がった村出身のロベス・ナウヤックは、グローバル・ステージを意識